

## 新型コロナウイルス禍の東京オリンピック・パラリンピック 歴史に残る10の出来事とは

### 10 Historic Events and Memories of 2020 Tokyo Summer Olympic & Paralympic Games amid the COVID-19 Crisis

佐々木 正 明\*  
SASAKI Masaaki

#### 要 旨

東京で2回目となるオリンピック・パラリンピックは新型コロナウイルス禍のためオリンピック史上初めて1年延期となり、2021年7~9月に開催された。感染症拡大の日本社会への影響を最小限にとどめるため、期間中、海外から入国する選手・関係者らの水際対策が徹底され、一方で、ほとんどの会場で無観客試合となり、当て込んだレガシー効果は失われた。東日本大震災の被災地もコロナ禍に見舞われ、大会の理念として掲げた「復興五輪」の目論見も大きく外れる形となった。一方で、国際的なスポーツ団体からは困難の中で大会運営を完遂した東京都や大会組織委員会スタッフを評価する声が寄せられ、参加したアスリートたちは世界中の人々に逆境に立ち向かう姿を見せた。「異形の大会」とも言われた今回の第32回夏季オリンピック東京大会は100年前に第一次世界大戦の惨禍とスペイン風邪の被害を乗り越えて行われた第7回アントワープ大会、1964年にアジアで初めて行われた第12回東京大会のように、後世の歴史に伝えられるようなイベントになるに違いない。オリンピック史上初めての出来事、さらには期間中に起こった国際的な事件や現象、人々の記憶に残るようなエピソードを10個厳選し、その事実関係や背景、国内外の評価を調べてまとめた。

#### Abstract

The second Tokyo Olympic and Paralympic Games had been postponed by one year for the first time in the history of the Games due to the COVID-19 crisis and was held from July to September 2021. To prevent the spread of infection in Japan, strict measures were taken at the border control by the Japanese government for all athletes and participants entering from overseas during the period. Most of the match venues held no spectators, and the expected legacy effect of the Games was not fulfilled. The areas affected by the Great East Japan Earthquake were also hit by the COVID-19 crisis, and the idea of "the Recovery Olympics", which was the purpose of the Games, was greatly deviated. On the other hand, international sport organizations have expressed their appreciation towards the Tokyo Organizing Committee and the Japanese government, which completed the Games management successfully in the difficult situation. Athletes showed audience all over the world how to face adversities. The 32nd Summer Olympic Games in Tokyo must be an event that will be passed down to future generations, just like the 7th Antwerp Games, which was held after the devastation of World War I and the Spanish flu, and the 12th Tokyo Games, which was held for the first time in Asia. In this report I selected 10 memorable media moments during the Games, including events that happened for the first time ever in the history of the Olympics and international news and social phenomena observed during the period.

キーワード：オリンピック、パラリンピック、国際オリンピック委員会、東京2020大会組織委員会、東京都、新型コロナウイルス

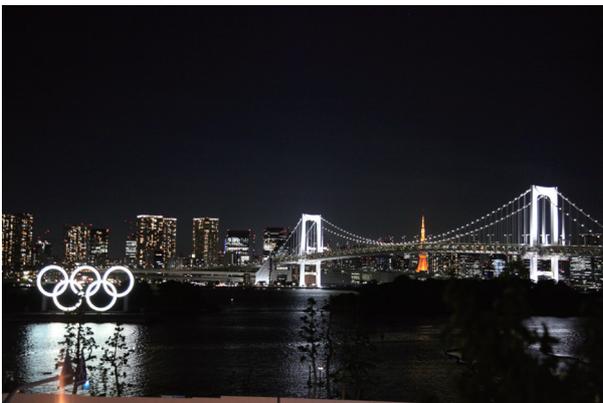
keywords：Olympics, Paralympics, International Olympic Commission, The Tokyo Organising Committee of the Olympic and Paralympic Games, Tokyo, Covid-19,

## 1. はじめに：史上初めて延期された大会

2021年7～9月にかけて行われた東京オリンピック・パラリンピックは日本で行われた2回目の夏季大会であるが、2020年1月から中国を発端にして世界中で猛威を振るった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックのために、近代オリンピック史上初めて1年延期されて実施された。大会形式は「異形の祭典」（毎日新聞）とも言われた。

感染症拡大の日本社会への影響を最小限にとどめるため、期間中、海外から入国する選手・関係者らの水際対策が徹底され、当て込んだレガシー効果は失われた。東日本大震災の被災地もコロナ禍に見舞われ、大会の理念として掲げた「復興五輪」の目論見も外れる形となった。

開幕前の7月中旬から、日本には感染力の強い変異株（デルタ株）が原因の第5波が猛威を振るい、大会14日目の8月5日に、東京都内ではパンデミック中としては最大人数（2021年12月時点で）の感染者5042人を確認。患者やその家族、医療従事者にとっては選手のメダル争いなどには一喜一憂できない期間にもなった。新聞には「熱戦の隣、鳴りやまぬ救急電話」（朝日新聞、7月24日）の見出しも踊った。



東京・お台場海浜公園の会場にはオリンピックマークのオブジェが設置された（筆者撮影、2021年7月）

そのため大会の評価については「五輪の本来のテーマである『平和の祭典』も、1964年の東京大会で経験した『国民的祝祭』というイメージも失われ、味気のない『運動会』となってしまった」（鈴木一人、中央公論9月号）との論説や、「コロナ禍で医療提供体制が深刻な機能不全に陥るなか強行された大会が、現場を支える人たちの努力によって、何とか破綻なく閉幕を迎えた」（朝日新聞社説、9月6日）などの指摘が出た。日本社会の上空は広くコロナ禍という厚い灰色の雲に覆われ、国民にはネガティブな印象を持たれる大会となった。

大会に巨額の支援を行っているスポンサーも開催に抗議する消費者らに配慮し、当初の予定より活動を縮小し

た。例えば、トヨタ自動車は国内で大会関連のテレビCMを取りやめ、大会ごとに各企業が披露する新技術のお披露目にはつながらなかった。日本経済新聞は9月6日付けで「大会での販促活動などで独占的な地位を得て、売り上げなどへの波及効果を見込んだ多くのスポンサーの思惑は外れた」と報道。第一生命経済研究所の永浜利広の試算として、「無観客開催」によって、当て込んでいた訪日客の増加や消費喚起など約1.4兆円が目減りしたとも伝えた。

しかし、延期開催どころかオリンピック中止論さえ渦巻く中で聖火の灯をなんとか消すまいと東京2020大会組織委員会（以下、組織委）、日本政府、自治体が一丸となって受け入れに尽力し、大過なく大会運営を成功裡に導いたことは、選手団を派遣した各国政府や国際スポーツ団体から絶賛されているのも事実である。

国際オリンピック連盟（IOC）のトーマス・バッハ会長は大会の総括として、「このオリンピックの後、日本人は世界中の人から賞賛を受けるだろう。青写真もロールモデルもない中、大会を実施し歴史を作った」と話し、国際パラリンピック委員会（IPC）のアンドルー・パーソンズ会長も総括記者会見で「コロナ禍を考えると、日本のような大会開催は諸外国ではできなかった。逆境に立ち向かう勇気を示した」と絶賛した。

2024年次期夏季大会のパリ組織委員会のトニー・エスタンゲ会長も「まるで魔法のようだった。世界の人々は何週間かの間、選手たちの活躍に心を寄せ、久しく感じなかった心の解放を共有した。パリは東京からバトンとともに大きなエネルギーをもらった」と評価した。

日本だけでなく、世界各国でもCOVID-19感染が拡大し、スポーツどころの雰囲気ではなかった。それだけに4年に一度の大舞台のために時間を犠牲にして練習に打ち込んできたアスリートにとっては、参加できたこと自体を純粋に喜び、英知をしぼって尽力してきた大会関係者に感謝の念が堪えないこともうなずけるだろう。

国際的なスポーツ団体や各国オリンピック委員会（NOC）は日本国民や政府、大会関係者に対する賛辞を惜しまない。組織委は9月28日に行われた第47回理事会で「大会振り返り（速報版）」で項を割いて、「各団体からのコメント」としてのコメントをまとめている。こうした評価は日本の主要メディアではほとんど報道されていないが、ここで主なコメントを紹介したい。

「東京2020の皆さんは、ご自身の功績を誇りに思ってください。また、ご自身の人生におけるスポーツと社会への最大の貢献の一つとして、喜んで受け入れてください。困難に直面したことで、成功の重要性、犠牲を払ったこと、そしてその中での皆さんの役割が、やがてほかの大会よりも認識されるようになるでしょう」（オリンピック夏季競技団体連合=ASOIF）

「東京2020のコミットメント、ハードワーク、そして献身は、最も困難な状況下で、世界を一つにしました」(国際水泳連盟=FINA)

「困難を克服し、ユニークなオリンピック体験の一部となったことへの満足感。東京2020の皆さんへの献身、努力、あきらめないこと、そして世界に希望を与えてくれたことに感謝します」(国際卓球連盟=ITTF)

「パンデミックの影響で準備に多大な不信感を抱いていたにもかかわらず、大会を成功させることができたのは、皆さん一人ひとりのおかげです。私たちが受けたホスピタリティ、親切さ、そして温かさは、今回の大会を特別なものにし、最も成功してくれたものにしてくれました」(ワールドパラアスレティックス=WPA)

「本当に素晴らしい大会と運営。スポーツマネージャーさんや会場のスタッフ、ボランティアの方々が素晴らしく、お願い事に瞬時に対応してくれたり、要求している以上に常に温かいサポートをしてくれたりしたおかげで観客がいないことも、毎日の検査も、行動制限の数々も全くマイナスに感じなかった」(カヌー難民選手団コーチ)

多くの民衆が犠牲になった第一次世界大戦の爪痕とスペイン風邪の惨禍を乗り越えて1920年にアントワープで開催された第7回夏季大会については、100年以上が過ぎた今でも、オリンピックが平和の尊さを伝える「人類統一の祝典」であるとして語り継がれている。今では当たり前となった5つの輪のオリンピック旗の掲揚や開会式での選手宣誓、荒廃からの復興を願う鳩が放たれたのもこの時だ。

いずれ、100年に1度の感染症パンデミックの中で行われた東京大会も歴史の評価が下され、この時、何があったのかが後世、再検証されていくに違いない。

## II. 研究の狙いと目的

東京オリンピック閉会式が行われた8月8日、ドイツの有力紙フランクフルター・アルゲマイネは電子版で、もし大会が中止されていれば多くの選手がオリンピック出場の機会を失い「災難となっていた」と指摘。一方で、「(今大会が)選手にとってどれほどの助けになったかについて、日本人が誇らしく思えるようになるまで数年を要するかもしれない」と伝えた。

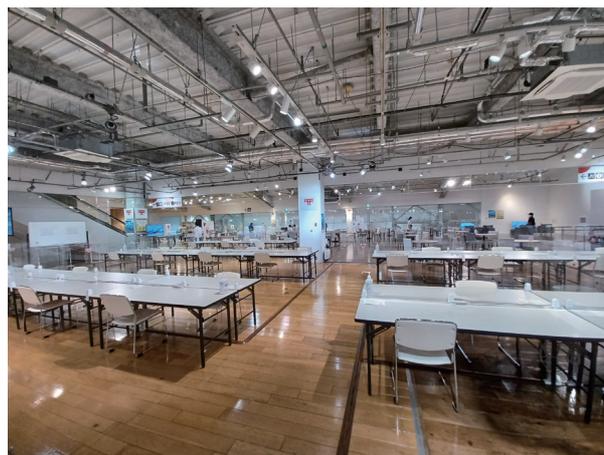
戦後復興と経済成長の高揚感の中で行われた1964年大会とは違い、コロナ禍によって国民的祝祭感が失われた2回目の東京オリンピック・パラリンピックについて、客観的に日本国民がその成果を振り返ることができるのは、時間を要することになるだろう。

世界保健機関(WHO)がCOVID-19のパンデミックを宣言してから2回目の冬を迎えてもなお、1日当たり数千人の死者、数十万人の新規感染者が出ている。9月に

閉幕した東京オリンピック・パラリンピックについてはすぐに話題にあがることも少なくなった。

本研究はそうした状況もふまえ、東京大会期間中に起こったオリンピック史上に残る出来事を後世に伝えるための資料として記録に残すことを主眼に置く。筆者は2021年3月まで報道機関で新聞記者を務め、これまでも2014年ソチ冬季大会、2016年リオデジャネイロ夏季大会で現地取材をした経歴を持ち、今大会の期間中も、フリーランスのジャーナリストとして東京に滞在。「朝日新聞Globe+」「Wedge Infinity」「SAKISIRU(サキシル)」などのメディアで多数の記事を発表した。

連日、東京都が有楽町に開設した「東京都メディアセンター」に詰めて、記者会見に参加したり、試合の様子を取材したりしながら、世界中の報道機関が洪水のように流すニュースや選手のSNS、関係機関・企業のオウンドメディアの情報を調べた。何がニュースなのかを精査し、記事を執筆した。タイトルにある「歴史に残る10の出来事」はその中から厳選して、抽出したものである。



東京都メディアセンター＝東京・有楽町(筆者撮影 7月22日)

東京都教育委員会は2回目の東京開催にあたって、オリンピック・パラリンピック教育の推進のために小学生、中学生、高校生向けのそれぞれ3編に分けて学習読本を制作し、実際に各学校ではこの書籍が授業に用いられた。

読本の中に、1964年東京大会について大きくページが割かれて説明されている。「東洋の魔女」との異名を取り、決勝戦で宿敵・ソ連代表チームを破って金メダルを獲得したバレーボール女子日本代表、大会3日目にウエイトリフティング・フェザー級で当時の世界新記録をうちたて、日本選手団で最初の金メダルを獲得した三宅義信ら日本人選手、さらには「裸足の英雄」ことマラソン男子金メダルのアベベ・ビギラ(エチオピア)や「東京の恋人」と人気を博した体操女子3種目金メダルのベラ・チャスラフスカ(チェコスロバキア)らが紹介されている。

さらには東京大会のレガシーとして、大会のために建設された国立霞ヶ丘競技場、日本武道館などの各施設、主要インフラとして整備された東海道新幹線、首都高速道路の当時の写真も掲載。「1964年東京大会では、競技や選手たちのために多くの施設が作られ、交通網などが整えられました。それらは今も私たちの生活に根付き、様々なシーンで用いられています」と記されている。

開催が1年遅れたことで今大会は近代オリンピックが始まって125年の節目の年を迎えた。先に紹介した1920年アントワープ大会、そして1964年東京大会に起こった出来事を念頭に置きながら、将来、教育現場でも教えられるような2020年大会の記録や記憶をここに明記したい。

### Ⅲ. 研究の手法

大会期間中、以下の6つの手段を主に用いてオリンピック・パラリンピックの情報を入手した。

- ①NHKや民放などでの試合中継と各メディアのライブストリーミングの視聴
- ②メディアセンターで得られる情報や公式記者会見での選手関係者の肉声
- ③大手新聞社の新聞、出版社の主要雑誌、国内外の各報道機関の公式サイトのニュース
- ④組織委、東京都、日本政府、IOCなどの関係機関が出す公式プレスリリース
- ⑤トヨタ自動車など大手スポンサー制作のオウンドメディアによる情報発信
- ⑥国内外のアスリートや関係者、著名人が展開しているTwitterなどのSNS情報

なお、筆者は2014年ソチ大会、2016年リオデジャネイロ大会ではIOCが報道機関の記者に限定的に出す、いわゆる「メディアパス」を保有し、各会場やMPC（メイン・プレス・センター）を歩き来して、取材活動をしていた。今大会はコロナ禍のために「メディアパス」を保有する記者たちの取材活動が制限されており、IOCや組織委もリモートでのアスリートの会見に参加できる機会を設けるなど、取材活動の便宜を図った。

筆者自身はメディアパスを保有していなかったが、そうした主催者側の計らいを活用できたこともあり、過去大会と比較しても取材の機会が大幅に制限されたことを感じなかった。SNSによってアスリートの「生の声」に容易にアクセスできるようになったことも大きい。

アスリートにとっても、メディアを媒介にせず自身自身の見解や感想が世間に直接、伝わるため、今大会期間中も積極的にSNSを使っていた。この傾向は今後の大会でも続くだろう。

### Ⅳ. 東京大会の新型コロナウイルス対策

東京大会で取られたCOVID-19対策は主に3つある。

一つ目は海外観客の入国を禁止したことだ。さらに、『セッション』と呼ばれるチケット販売の単位では、全体のおよそ97%に当たる724セッションが無観客となり、観客が入るセッションは26だけ（NHK、7月10日）となった。有観客セッションは静岡県内で行われた自転車競技など一部の会場だけで、観戦者はオリンピックが4.3万人、パラリンピックは1.5万人となった。2020年3月の大会延期決定前に販売されていたオリンピックチケット約675万枚、パラリンピックチケット190万枚は払い戻しとなり、主催者側にはいるチケット収入900億円が失われた。

しかし、公道上で行われた札幌での男女マラソン、東京、神奈川、山梨、静岡の1都3県14市町村の公道を巡る総距離約189キロのルートで行われた自転車ロードレースなどでは沿道に多くの観戦者が訪れた。

二つ目はオリンピック・パラリンピックの来日関係者数を大幅に絞ったことだ。大会延期決定前は、IOC委員や職員らの「オリンピックファミリー」、各国オリンピック委員会職員、各国国際スポーツ連盟職員らをあわせてオリンピックで14万1000人の来日を見込んでいたが、その後、2020年3月の延期決定後見直しを3回行い、最終的に4分の1の3万3000人に絞った。

同様にパラリンピックは当初見込みの約3.6万人から3分の1の1万人に削減した。

ただ、「アスリート・ファーストの原則」は守られた。オリンピックでは33競技339種目に出場する205の国・地域と難民選手団の選手11259人、パラリンピックでは22競技539種目に出場する162の国・地域と難民選手団の選手4403人の人数は削減しなかった。

三つ目は大会に参加・関与する選手や報道陣ら7つの帰属にわけて期間中のコロナ対策のための規則を定めたプレイブックを作成したことだ。

7月1日から適用され、選手・関係者の行動は大幅に制限された。ルールに違反した場合は制裁金を科すことなどが定められた。プレイブックで分けられた7つの帰属は以下のようになる。

- ①出場選手、コーチ、チーム役員ら
- ②オリンピックファミリー
- ③職員、ボランティアら大会スタッフ
- ④国際スポーツ連盟関係者ら
- ⑤記者、フォトグラファーら
- ⑥テレビ放送関係者ら
- ⑦マーケティングパートナー



2021年6月に公表された公式プレイブック

NHKニュース（6月16日）は「プレイブックには、新型コロナの検査について頻度や方法について細かく示されている」と報道。柱となったのは頻繁なウイルス検査と、選手らが外部との接触を避けるバブル方式の徹底だった。

選手やコーチなどは、日本に出国する前の96時間以内に2回の検査を行い、このうち1回は72時間以内に行うことが求められた。日本に入国する際も空港で検査を受け、その結果が出るまで空港内で待機しなければならない。さらに空港で陰性だった場合でも、原則として毎日、唾液による抗原検査を受ける必要があるという。

選手団は日本に向けて出国する前にあらかじめ入国後14日間の活動計画書を作り、組織委に提出しなければならない。公共交通機関は原則利用できず、移動は活動計画書に記載した試合会場や宿舎などに限られる。観光地に行くことは認められていない。健康観察などを行なうアプリと接触確認アプリ「COCOA」の2種類のスマートフォン向けアプリをインストールして行動し、検温結果などの報告も義務付けた。

食事については、選手村に滞在している人は選手村か大会会場で取ることが原則。IOCや組織委などは各組織に連絡窓口となる「コロナ対策責任者」を任命、ルール徹底と管理を求める。

マスクを着用しないこと、活動計画書で届けた場所以外に外出すること、故意に検査を受けないことなどは違反行為となり、大会参加に必要なIDカードの取り消しや失格、制裁金を科す場合もあることが規定された。

その結果、検査回数は100万回超に上り、累計陽性者（ホストタウン関連を除く）はオリンピック関連期間（7月1日～8月11日）で国外174人、国内373人、パラリンピック関連期間（8月12日～9月8日）で国外80人、国内243人となった。

陽性率は累計で1000人に1人以下と大幅に低く抑えられ、来日大会関係者の重症者数も0人だった。オリ

ピック最終日に都内で行われたIOC総会では、この感染症対策の成果を受けたトーマス・バッハ会長が「本当に素晴らしい仕事をしてくれた」と褒めた。さらに、クリストフ・デュビIOCオリンピック統括部長が「短期間でこれほど検査をした集団はない。我々は安全な大会を開催する約束を守った」と語った

組織委の「大会の総括」報告書には「専門家の入った会議でも、無症状のうちに早期に陽性者を発見できる態勢、その後大きく感染が拡大しない体制がとられていたと評価」と記された。

## V. 2020東京大会の10の出来事

こうしたことを背景に、東京大会では期間中に、オリンピック・パラリンピック史上に残る出来事が数多く発生した。「10の出来事」は史上初や異例のケースを含め、1964年大会の記憶のように国民の間に後世語り継がれていくようなエピソードを選んだ。選手らの年齢は大会時のものである。

### (1). 兄妹同日金メダルは天文学的数字

東京オリンピックで日本選手団は、過去最高の金メダル数27個を獲得し、国別ではアメリカ、中国に続く3個の獲得数となった。銀14個、銅17個を含めた合計メダル数58個も前回リオデジャネイロ大会の41個を大幅に上回り、過去最多となった。

その中でも今後、破られそうもない記録が大会3日目に成し遂げた柔道男子66キロ級の阿部一二三（ひふみ）選手（23）、女子52キロ級の阿部詩（うた）選手（21）の兄妹同日金メダルだろう。国際柔道連盟（IJF）の公式Twitterは「個人スポーツでオリンピック史上初のきょうだい同日金メダル」と紹介した。

どれほどレアケースなのかを算出する手法は様々だろうが、単純に日本人の総人口をふまえた割合の計算で示してみたい。総務省統計局の2021年7月1日現在の日本人人口は1億2301万人（注：在日外国人らを含む総人口1億2555万人とは違う）。今大会、金メダルは27個となるが、野球（選手24人）、ソフトボール（同15人）、フェンシングエペ団体（同4人）の各チームの代表選手、加えて卓球混合ダブルスの水谷隼（じゅん）選手（32）と伊藤美誠選手（20）の2人にはそれぞれ金メダルが授与されている。その結果、金メダリストを獲得した総選手人数は68人となる。

この結果、日本では東京大会で180万8970人に1人の確率でオリンピック金メダルを受け取った計算になる。阿部兄妹の両親は約180万人に1人しかいない子2人を兄妹で授かったとも言え、さらに、同じ試合日に2人とも試合が組まれ、2個の金メダルが約30分以内に成し遂げられたということになれば、この快挙の達成は

天文学的数字の確率だろう。



### IJFの公式ツイッターでの紹介= 7月25日

海外メディアも試合直後に「ハリウッド映画でもありえないような話」(米NBC電子版)「アベ一家は金色に染まった。オリンピックの歴史が作られた日」(英Sky Sports)「日本柔道界の天才きょうだい」(韓国・中央日報)などと報じ、この偉業を伝えている。

例えばきょうだいと同じ代表チームに入って、オリンピック王者になることはありえる。男女混合種目も増えているので、きょうだいがペアなどを組んで同一種目の達成なら今後もありえなくはない。しかし、阿部兄妹は柔道家でありながらも、たまたまそれぞれの種目の決勝戦が同日に組まれる偶然が重なったうえでの快挙達成であり、これに並ぶのは世界広しと言えども、2024年パリ大会、2028年ロサンゼルス大会でのこの2人の連覇、3連覇でしかありえないのではないかと。

歳が近い阿部兄妹のメダル獲得は彼らの子ども、孫にも受け継がれる可能性があることを考えると、「アベ一家」のオリンピック物語は第2章、第3章も続く期待が膨らむ。

19世紀末に柔道を創設し、アジア初のIOC委員となった嘉納治五郎が死去したのは1938年。柔道が正式にオリンピック競技となるのは1964年東京大会であり、1992年バルセロナ大会で女子柔道が正式種目となった。日本でオリンピックを開くことを生涯夢みた嘉納でさえも、まさか男女のきょうだいがオリンピックの表彰台の

一番高いところに同日に立つことが実現するなど考えもしなかつただろう。

### (2). 12歳11か月の史上最年少メダル獲得

東京大会では「アーバンスポーツ」という、若者に人気の競技が加わった。小学館デジタル大辞泉によれば、アーバンスポーツとは「広い場所を必要としない、個人が気軽に始められるなどの理由で、都市住民が参加しやすいスポーツ。BMX(フリースタイル)・スケートボード・スポーツクライミング・パルクール・インラインスケートなど」と説明されている。

各メディアでは「都市型スポーツ」という表現も用いている。このうち、東京大会ではBMX(フリースタイル)、スケートボード、スポーツクライミングが正式種目として採用された。

日本勢はスケートボード競技で世界のアスリートを席巻した。大会13日目の8月4日に行われたパーク女子で、中学1年生で12歳11か月の開心那(ひらき・ここな)選手が銀メダルを獲得、日本人最年少選手のメダル獲得者となった。

今大会最年長金メダリストとのソフトボールのエース、上野由紀子投手(39)との年齢差は27歳。親子ほどの開きがある。実際、開選手の両親は43歳といい、開選手は13歳10か月で同じくスケートボード競技のストリート女子で優勝した西矢椛(もみじ)選手と並んで、日本でも数例しかない中学生メダリストの仲間入りを果たした。

一夜明けた翌5日に行われたメダリスト会見では開選手も参加。「オリンピックがすぐに終わっちゃったので、全然実感がないです」「(大会後は)北海道でいつもスケートをしている人たちと遊びに行きたいです」と語り、小学校を4カ月前に卒業したばかりのあどけない素顔を示した。

IOCのアーカイブによると、1896年アテネで始まった近代オリンピックでは、そのアテネ大会体操競技に出場し銅メダルを獲得した10歳のギリシャの選手が「最年少」の記録とされている。

しかし、1900年パリ大会のボート競技で、観客席にいた8歳くらいのフランス人の無名の子が男子オランダ代表ペアの舵手として飛び入りで出場(もともとの舵手が体重オーバーのため)して、優勝。史上最年少メダリストではないかと言われ、米紙ウォール・ストリート・ジャーナルは誰が史上最年少記録なのかは「オリンピックの歴史における大いなる謎」(電子版、2016年8月2日)と伝えている。

### (3). 初のトランスジェンダー選手が出場

東京大会の開会式ではハイチ人の父親と日本人の母親

を持ち、米国で暮らしているテニスの大坂なおみ選手が最終聖火ランナーを務め、今大会のモットーである多様性と調和の大切さを世界に訴えた。

大会11日目の8月2日、重量挙げ女子87キロ超級に、男性から女性への性別を変更したニュージーランドのローレル・ハバード選手（43）が出場。トランスジェンダーの選手として初めて、生まれた性別とは別のカテゴリーで大会へ参加した。

もともとニュージーランドで男子の国内ジュニア記録を打ち立てた選手。35歳の時に男性から女性へと性を変え、その後、女子選手として競技に参加するようになった。国際オリンピック委員会（IOC）が定めるテストテトロン血中濃度の規定をクリアし来日。試合では記録なしの結果となったものの、東京で確かな足跡を残した。

競技後、ハバード選手は現役引退を表明した。ロイター通信（8月3日）によれば、「これが今後、歴史のほんの一部、小さな一歩になることを願う。時がたつにつれ、今後起きていくことによって、今回のこの意味の大きさが薄れていくことを本当に望んでいる」と語り、トランスジェンダーの参加が特別でなく一般的なことだと受け入れられる状況に変わっていくことを希望した、という。

一方で、ハバード選手が「歴史を作った」と報じたのは英BBC。まだまだトランスジェンダー選手を取り巻く環境や制度は整っていないが、多様性への理解が進んでいく中で、東京大会は初のトランスジェンダー選手が出場した大会として、オリンピックだけにとどまらず、現代史の1ページとしても刻まれることになるだろう。

#### (4). 男女の参加人数がほぼ半数に

近代オリンピックが始まった1896年アテネ大会では体面などを理由に女性の参加は禁止されていた。4年後の1900年パリ大会は出場が許されたが、参加人数はわずか22人。1世紀以上がすぎ、東京大会ではほぼ男女の参加人数が半数になった。

IOCの割り当てによれば、1万1000人の参加者のうち約49%が女子選手。組織委は「史上初のジェンダー・バランスのとれた大会」とアピールする一方、トーマス・バッハ会長は東京大会について「オリンピック・ムーブメントは、ジェンダー平等のスポーツ界を想像する取組みの新たな節目になる」と語った。

2018年に「ジェンダー平等再検討プロジェクト」を立ち上げるなど、男女共同参画を推進してきたIOCは東京大会を前に、さらにすべての国・地域の国内オリンピック委員会（NOC）ごとに男女1選手ずつが共同で旗手を務められるよう規則を変更した。

実際の東京オリンピック開会式ではほとんどの国々が

男女一人ひとりの選手が国旗をもって登場した。美しい民族衣装に身を包んでカザフスタンの旗手を務め、SNS上で「カザフのお姫様」として話題になった同国女子陸上選手のオリガ・レイパコワは、このIOCの規則変更があったからこそ、全世界にその華麗な姿が披露されたのであった。

一方、東京大会では男女の種目が同等になるよう確保され、男女混合の種目もリオ大会の9種目から18種目に増えた。大会4日目の7月26日にライバルの中国人ペアを下し、水谷隼選手と伊藤美誠選手が優勝した卓球混合ダブルスも初種目。組織委がまとめた大会報告書によれば、この卓球混合ダブルスの金が最も「いいね!」を集めた投稿ランキング1位だったといい、東京大会でのシンボルともなる金メダルだった。

しかし、スポーツ界では旧態依然とした男女差別も露呈することがある。世界陸連（WA）は11月下旬、関連する調査結果を発表した。東京オリンピックに出場した選手や関係者から抽出した161人を対象に約24万の投稿を分析したところ、SNSで受けた誹謗中傷の87%は、女性が標的になっており、中傷の内容は性差別が最多で29%に上った。

まだまだ女子選手が競技に打ち込める社会環境にはない国もあるが、IOC傘下のメディア「オリンピックチャンネル」は「ジェンダー平等について、IOCが極めて強力なメッセージを発信」（3月10日付け）として、2024年パリ大会では「完全なる男女平等が実現する見込み」と伝えており、東京大会を機に、女子オリンピックが輝く機会はさらに増えていくだろう。

#### (5). 人口3万4000人の小国の初メダルと、アフリカの新生国家と日本の絆

世界の国・地域にあるナショナル・オリンピック委員会（NOC）。東京大会には205のNOCと難民選手団が参加した。

このうち、オリンピック史において、アジア地域ではバングラデシュやネパール、欧州地域ではボスニア・ヘルツェゴビナやモナコ、アフリカ地域ではリビアやマリ、北南米地域ではボリビアやエルサルバドル、オセアニア地域ではナウルやツバルーなどまだおよそ70の国・地域がメダルを獲得していない。

その中で、イタリアに国土を囲まれた人口3万4000人の小国サンマリノが東京大会で快挙を成し遂げ、メダル獲得国の仲間入りを果たした。

大会7日目の7月29日に行われた射撃競技のクレー・女子トラップで、33歳のアレッサンドラ・ペリリ選手が同国史上初の銅メダルを獲得した。好調のペリリ選手は9日目の31日に行われた男子選手と組む混合トラップで、38歳のジャン・マルコ・ベルティ選手とともに

出場。決勝戦でスペインを相手に僅差で敗れたものの、銀メダルを獲得した。サンマリノは1960年のローマ大会に出場して以来、毎回、夏季オリンピックに選手団を派遣していたが、今大会で2個のメダルを獲得したことになる。

帰国した2人はメダルをぶらさげて、家族や仲間の祝福の抱擁やキスを受け、熱狂の中で東京大会の快挙を味わった。SAKISIRUの記事（8月7日）によると、パリリ選手は「努力してここにたどり着いたから、本当に誇らしい」と涙を流して喜んだ。

サンマリノ国民にとっては、同国初メダルの金字塔が日本で打ち立てられたことが今後、語り継がれていくことになる。

さらにこの項ではアフリカの2つの新生国家と東京オリンピックとの絆を紹介する。

かつて1960年代までにアフリカで存在した「北ローデシア」というイギリスの保護領があった。1964年10月10日に開幕した東京オリンピックには「北ローデシア」として出場。ところが閉会式当日の10月24日午前0時（日本時間同7時）に北ローデシアはザンビアとして独立国家となった。当時の組織委は日本時間同日夕刻開催の閉会式に間に合わせるため、新国旗を用意し、式典で披露した。在ザンビア日本国大使館は公式サイトに当時のエピソードを紹介し、「新生ザンビアの国旗が東京国立競技場に揚々と翻ったのは、ザンビアの選手団や関係者にとってさぞ誇らしいことだったでしょう」と伝えている。

2回目の東京大会でも、ザンビアのケースのようにアフリカの新生国家が日本に大きな足跡を残した。

2011年、アフリカ大陸の54番目の国家として独立した南スーダンの陸上競技選手団（コーチ1人、選手4人）が群馬県前橋市で長期合宿を実施。滞在期間は1年9カ月にわたり、トレーニングを積んだり、市民と交流したりする様子は国内外の報道や前橋市、日本外務省の公式サイトなどを通じて世界中に知れ渡った。

前橋市は、独立後も不安定な情勢が続く、国民の3分の1が難民・避難民となっている南スーダンの選手たちが東京大会で活躍することで「南スーダンの平和促進」につながり、さらに、市民と選手たちが直接交流することで「平和について考える良い機会」になるとして、長期事前キャンプの受け入れを決意した。

南スーダン側と合意に達し、2019年11月に選手団一行が前橋市入りを果たした。

さっそく選手たちは市内の練習場で練習を開始し8か月後に迫った本番に備えたが、大会はコロナ禍により1年延期されてしまう。前橋市はふるさと納税制度を活用し、3000万円を集めて、キャンプ延長の滞在費の資金を用意した。選手たちはトレーニングを積みかたわら、

幼稚園を訪問して園児と一緒にレクリエーションを楽しんだり、中学校の体育大会に参加してリレー対決に挑んだり、高校生とは国際交流を図るイベントに参加したりして、前橋市内の児童・生徒らとの交流を深めた。その様子は前橋市の公式サイトで逐一、報告された。



前橋市公式サイトより

期間中、国内メディアはこぞって南スーダンと前橋市の結びつきを報道し続けた。海外メディアの記者たちも前橋市を訪れ、ロイター通信（2020年2月6日）は「市職員だけでなく、ボランティアの通訳者、日本人コーチが週に5日間、競技場での練習を助けている」と報道。欧州メディアのユーロニュース（2020年6月29日）は「人生が変わった。ここではとてもハードなトレーニングを積んでいる。新しい世界を経験している。すべてのことが僕にとってはおもしろいのです」と語った、パラリンピアン・クティヤン・マイケル選手の声を伝えている。

大会直前の2021年7月16日には盛大な壮行会が開催され、2人の男女選手が東京大会に出場。男子1500メートルに出場したグエム・アブラハム選手は記録を大幅に更新し、3分40秒86の南スーダン・ナショナルレコードを刻んだ。朝日新聞は8月3日付けで「前橋は『セカンドホーム』とするアブラハム選手の記事を組み、アブラハム選手がこの1年8カ月、日本語学校に通いコン

ピューターも学んだことを伝えた。大会前には応援メッセージをたくさんもらったとし、記者からの問いかけにアブラハム選手は「よどみない日本語」でこう話した。

「群馬の人、みなさん、ありがとうございます」

選手団は帰国直前の8月26日、前橋市役所を訪れ、見送りセレモニーに参加した。その様子を詳細に報じた上毛新聞によれば、選手らには地元の子供が作った自家製の金メダルが贈られ、市スポーツ親善大使の委嘱状が手渡された。女子200メートルに出場したモリス・ルシア選手は涙を浮かべながら「支えてくれてありがとう」と語ったという。同紙は「市役所前に集まった人たちは花道を作り、『元気でね』『また会おうね』などと声をかけ、選手団を乗せたバスが見えなくなるまで見送った」と伝えている。

東京オリンピックで初めてサンマリノが獲得した銀メダル、そして、南スーダンの選手団が受け取った園児たちの手作り金メダルは、後世語り継がれるエピソードになるに違いない。

#### (6). 選手の政治的、宗教的、人種的な宣伝活動が一部解禁に

「オリンピック開催場所、会場、他のオリンピック・エリアにおいては、いかなる種類の示威行動または、政治的、宗教的、人種的な宣伝活動も認められない」

かつて、オリンピックはこのオリンピズムの根本原則をまとめたオリンピック憲章第50条により、期間中に宣伝活動をした選手を処罰の対象にしていた。

1968年メキシコ大会では、陸上男子200メートルで金メダルを獲得したトミー・スミス選手、銅メダルのジョン・カロス選手が表彰式の時に、拳を突き上げるポーズをして黒人差別に対して無言の抗議をした。オリンピック憲章第50条が重くのしかかり、その後、2人は米国選手団から追放された。

東京大会ではこの50条について新たな指針に基づき、一部が緩和された。2020年5月、米国での白人警官による黒人暴行死事件をきっかけに広がった「ブラック・ライブズ・マター (BLM)」運動を背景に、世界のスポーツ大会や国際試合などで人種差別への抗議のポーズをとるケースが相次ぎ、表現の自由を妨げるとして50条を見直すべきだとの声が大きくなっていった。

IOCはこうしたことを背景に、選手のパフォーマンスを容認。意思表示する際には、①人や国を標的としたものではない②他国の国歌演奏時には実施しない③他の選手の妨害行為ではない—などの条件をつけた。

この結果、東京大会では選手の意思表示が相次いだ。サッカー女子の開幕日となった7月21日には、札幌ドームで対戦した英国代表とチリ代表の選手が試合開始前に片膝をつき、人種差別の抗議の意を示した。

陸上女子砲丸投げで銀メダルを獲得した米国のレーベン・ソーンダース選手は大会10日目の8月1日、表彰式で、頭上で両手を交差させて「×」の形になるポーズをつくった。「抑圧された人々」への連帯を示す抗議行動だという。女子体操に出場したコスタリカの18歳のルシアナ・アルバート選手は大会3日目の7月25日、床運動での演技で、BLM運動の膝つきとメキシコ大会のスミス選手らが取った拳をつきあげるポーズを組み合わせるパフォーマンスを行った。

大会閉幕翌日の8月9日付けで、朝日新聞は「差別に抗議 五輪は変わった」とする特集記事を掲載した。とはいえ、特定の個人や国、組織などへのメッセージはこれまで通り違反としており、IOCのトマス・バッハ会長も「表彰台とメダル授与式は、政治的あるいはその他のデモのために作られたものではない。選手の個人的見解を示すためではなく、スポーツの功績を称えるためのものだ。大会の使命は、全世界の人々が一堂に会し、互いに平和的に競い合うこと」と指摘した。今後、このルール変更がどうなっていくかは一つの研究対象となるだろう。

#### (7). テニス界の英雄、ノバク・ジョコビッチがラケットを観客席に投げ入れる

四大大会（グランドスラム）通算20勝の実績をひっさげて、東京大会に出場したテニス界のスター、ジョコビッチ選手は4年に1度の金メダルを加える「ゴールデンズラム」を目指したが、あえなく準決勝で敗退した。さらに格下を相手に3位決定戦でも敗れ、メダルなしの結果に終わった。

前代未聞のふるまいに出たのは大会9日目、7月31日の3位決定戦の一コマ。ジョコビッチはあろうことか、相手のショットを拾えず、勢い余って自分のラケットを観客席に投げ入れた。そのあともミスを連発。イライラしてラケットをネットにぶつけて破壊するなど、メンタルをコントロールできない場面が続いた。

ラケットを観客席に投げ入れるという行為は、今大会が新型コロナウイルス禍により無観客になっていなければ実現しなかった。

ジョコビッチは大会2日目の24日の初戦を終え、「あまりの暑さと湿気、そして空気がこもっているせいで、両肩に重りが乗っているような感覚だ」「(選手たちは)常に脱水状態にある」(英BBC)と訴え、主催者に試合時間を遅らせるよう要望していた。

ゴールデンズラムを達成できなかったのは東京の気温が影響した可能性もあり、「観客席のラケット投げ事件」は、2020年大会のコロナ禍の無観客と東京の過酷な猛暑があったからこそそのエピソードと言えよう。

組織委は大会期間中、猛暑日（最高気温35度以上）

は観測されなかったが、湿度は高く、熱中症の危険度を判断する暑さ指数（WBGT）の危険レベルに達した日がオリンピックの試合が行われた19日間で9日あったことを報告した。

組織委の橋本聖子会長は東京大会閉幕から1か月たった10月中旬に朝日新聞などのインタビューに応じ、7～8月の真夏に行われたオリンピックについて「この時期にしかやれないのは無理だと、会長をやってつくづく思った。IOCが持続可能な大会を考えるなら、世界のスポーツ団体と（新たな）枠組みを話し合う必要がある。時代に求められる五輪に生まれ変わっていかなければ」と提言した（朝日新聞、10月7日）

将来、IOCがアスリートファーストを原則にオリンピックの開催時期の改革に本格的に取り組めば、ジョコビッチのラケット観客席投げ入れ事件は真夏に大会が行われていた時代の「過去の遺物」になるかもしれない。

#### (8).「裏切者」「殺す」と脅されたベラルーシ代表の陸上女子選手

今大会で、試合やメダル争い以外のエピソードで最も大きな騒動となったのが、ベラルーシ陸上女子チーム代表、クリスツィナ・ツィマノウスカヤ選手（24）のポーランドへの政治亡命だろう。

ツィマノウスカヤ選手は大会8日目の7月30日、最初の参加種目、100メートル予選に出場（予選落ち）した後、本人が「まさかこんな政治スキャンダルになるとは思っていなかった」と振り返るように人生が流転した。

ベラルーシは「欧州最後の独裁者」と言われるルカシェンコ大統領が、反体制派を徹底的に弾圧。トップアスリートさえも政権にたてつけば、迫害の対象となる。

今度は8月2日の200メートル予選への準備を進めていたが、ここでコーチ陣から5日に予選が予定されていた、これまで練習したことのない4×400メートルリレーへの強制的な参加を指示される。

ツィマノウスカヤ選手は30日の夜、自身のインスタグラムに「上に立つ人たちは、私たちアスリートに敬意を払い、時には私たちの意見を聞く必要もあると思う」と書き込み、強制的なリレー参加への不満をあらわにした。

翌日、状況は急転直下する。米CNNなどによると、ツィマノウスカヤ選手にはこの投稿を削除するよう、チーム関係者から「脅し」をかけられ、さらに「この問題はもはや（陸上競技）連盟のレベルでも、スポーツ省のレベルでもなくなり、もっと高いレベルの問題になった」「（ツィマノウスカヤ選手を）オリンピックから排除して帰国させなければならぬ。なぜならチーム競技の妨げになるからだ」と告げられた」のだという。

8月1日、ベラルーシ・オリンピック委員会は同行医

師による「（彼女の）感情的、精神的状態」の診断を理由に、200メートルと4×400メートルリレーの欠場を発表。ここでツィマノウスカヤ選手の東京オリンピックへの出場は断たれた。「私には、健康問題もトラウマも精神的な問題もない。走る準備ができていた」と反論する意向を無視し、彼女に帰国するよう指示した。

1日夜、ツィマノウスカヤ選手は再び、SNSでメッセージを流す。「私は圧力をかけられた。彼らは同意なく、強制的に私をこの国から出国させようとしている。国際オリンピック委員会（IOC）に介入を求めると訴え、経路帰国便への搭乗を余儀なくされた羽田空港で警察官に保護を求め、政治亡命を申請。スポーツ選手難民を支援しているIOCや、ベラルーシの人権問題に制裁措置を科している欧州連合（EU）諸国がすぐに動き、ツィマノウスカヤ選手はルカシェンコ政権から逃れた人たちが多く、国家の支援体制が整っているポーランドへの亡命を決めた。

ツィマノウスカヤ選手は昨夏、ルカシェンコ政権が徹底的に抗議デモを弾圧したことに、他の若い陸上仲間たちとともに反対する意見を表明していた。

インスタグラムでの声明には「私たちは国家の側につけない。私たちは市民や仲間、同僚や友人たちに向けられた弾圧をこれ以上、容認することはできない」「私たちは表現の自由を求め、ベラルーシのどの市民にも自分の意見を表明する権利はあると考える。私たちは弾圧のない世界を求め」とメッセージが記された。

ツィマノウスカヤ選手はワルシャワに行く前に東京の報道陣に対して「私はこれまでに一度限りとも政治に介入したこともないし、政治について何かを語ったりしたこともない。選手たちに何の相談もなく、リレーへの構成メンバーを決めたコーチ陣のハラスメントをあきらかにしただけだ」と語っている。

ベラルーシの反体制派メディアのジャーナリスト、タデウシュ・ギチャンは自身のツイートで、ベラルーシの政権派「ジャーナリスト」からツィマノウスカヤ選手に対して、「クソ野郎が」「売女め」「殺す時が来た」などのメッセージが寄せられているとして、ベラルーシ国内で誹謗中傷キャンペーンが展開されていることを明らかにした。

国営メディアCTBによると、ベラルーシ議会代表者院（下院に相当）議員のビタリー・ウトキンは「彼女の行為は裏切りであり、卑劣なふるまいだ」とコメント。「これはベラルーシで起こっていることを念頭に入れた、あらかじめ仕組まれた政治的な行動の可能性がある」とツィマノウスカヤ選手を酷評した。

1992年バルセロナ大会で旧ソ連合同チーム（EUN）の一員としてカヌー競技で金メダルを獲得、現在はベラルーシの国会議員を務めるアレクサンドル・マセイコフ

もツィマノウスカヤ選手を批判している。ロシア国営通信に対して「彼女はオリンピックに闘いに行ったのではなく、自身の立場を表明にしに行ったのだ。何かしらの自分のプランがあって、自分に関心を惹きつけるようにする必要があったのだ」と亡命希望をもともと抱いて行動に移したに過ぎないとの自説を展開した。

ツィマノウスカヤ選手はポーランドに政治亡命後も現役続行を宣言した。2021年の真夏の出来事はその後も彼女を取り巻く人生を大きく変えることになるだろう。

### (9). 体操界の女王から「順天堂に永遠に感謝します♥」の感謝ツイート

**Simone Biles** ✓  
@Simone\_Biles

...

I'll forever be thankful for Junetendo ♥ for allowing me to come train separately to try to get my skills back. The Japanese are some of, if not the sweetest people I've ever met.

ツイートを翻訳

**GymCastic** @GymCastic · 8月4日

The Secret Japanese Gym Where Simone Biles Trained for Her Olympic Comeback [buff.ly/2WUfA7z](http://buff.ly/2WUfA7z)

<p>tics—away from the intense spotlight that radiates over the greatest gymnast ever.</p> <p>She found it in a quiet distant suburb of Tokyo, in a facility near rice fields about an hour's drive from the competition venue.</p> <p>Two hours after Aoki got the call, Biles arrived. He had quickly talked to the gymnastics coaches. They locked all the entrances for her. No one would catch a glimpse of her as she tried to regain skills that had been hard-wired for her just days earlier.</p> <p>She practiced for two hours that day. Then</p>	<p>There was a gymnast who needed to use the school's gym.</p> <p>"This is a complicated matter," he was told. "But this is for Biles."</p> <p>About 12 hours earlier, Simone Biles had stunned the world by pulling out of the women's team final while it was still under way, a shaky vault leaving her certain she could not continue to perform safely or effectively.</p> <p>Biles would later say she couldn't understand how or why everything went wrong, but that she had lost her sense of where she was in the air as she twisted and</p>
---	---

午前4:02 · 2021年8月5日 · Twitter for iPhone

4,144 件のリツイート
244 件の引用ツイート
6.7万 件のいいね

🗨️
↻
♥️
📤

### バイルス選手のツイート

今大会ほどトップアスリートの心の健康に注目があつたオリンピックはなかった。そのきっかけを作ったのは、2016年リオデジャネイロ大会4冠の米体操女子のエース、シモン・バイルス選手（24）が大会5日目の7月27日の団体女子決勝で途中棄権したことだ。

女子体操競技は東京大会もバイルス選手の独壇場になると思われた。しかし、この団体決勝の前日に、バイルス選手に空中での技を繰り返す際に演技と身体の違いが難しくなる「ツイスティ」という症状が発症。「メンタルヘルスを優先する必要がある」として、2連覇がかかった大会7日目の29日の個人総合も欠場した。

しかし、12日目の8月3日、最終種目となった平均台に復帰。「すべての金メダルよりも大きな意味がある」とする銅メダルを獲得した。

実は、バイルス選手は「静かな環境」で回復できるようにひそかに、千葉県印西市にある順天堂大学の施設で練習していた。今大会を終えた後、自身のツイートに「自分の技術を取り戻すために、個人トレーニングに来ることを許してくれた順天堂♥には一生感謝する。日本人は、私がこれまでであった中で最も優しい人々だ」と書き込んだ。

IOCによると、トップアスリートの約半数が睡眠障害、3人に1人が不安や「うつ」の症状を抱えているという。命を絶つことさえ考えるアスリートの心を寄り添うサポート体制がかつてないほど重要になっている。

メンタル面で苦しんだバイルス選手と順天堂大学のエピソードはレガシーとして語り継がれるだろう。

### (10). 「アスリートよ、大志を抱け」の名解説

今大会も数々の名言がお茶の間を沸かせた。「10の出来事」の最後に、東京大会を盛り上げた言葉として紹介したい。8月9日の日刊スポーツはこうした期間中の数々の名実況と解説を紹介した。

「ゴン攻め」「ピッタビタ」は、今大会から採用されたスケートボード・ストリートで、解説者となった瀨尻稜が、選手が積極的なプレーや大技を繰り返す際に用いた独特の言い回しで話題になった。フジテレビ倉田大誠アナウンサーは同じスケボー女子ストリート決勝で、西矢椏が金メダルを決定づける大技を決めて「13歳、真夏の大冒険」と実況し、両方とも「現代用語の基礎知識選2021ユーキャン新語・流行語大賞」の候補30語のうちの1つに選ばれた。

この論文では、大会16日目の8月17日に行われた女子マラソンのレース中に生まれた言葉を紹介したい。

レースの解説を務めたのはロサンゼルスオリンピック女子マラソン代表でスポーツジャーナリストの増田明美。これまでの数々の大会でも、選手の好きな食べ物や彼氏がいるかどうかなど「細かすぎる情報」を伝え、視聴者の評判を呼んできた。

酷暑の中のマラソン種目は「アスリートファースト」を理由に、会場が東京から札幌に移された経緯がある。

増田はレース中に、北海道開拓の父、クラーク博士が残した有名な言葉「Boys, Be Ambitious」（少年よ、大志を抱け）にひっかけて、「Athlete, Be Ambitious」（アスリートよ、大志を抱け）の名解説を行った。

札幌に会場が移されなければ、増田の名言も生まれなかった。オリンピックの熱き戦いがコロナ禍でも敢行されたことを象徴する言葉として、ここに記したい。

## VI. おわりに

サンケイスポーツは東京オリンピックが開幕した翌日の7月24日、1964年大会の開会式に一面で掲載された記事を再掲した。執筆者は元学徒兵で、当時同紙運動部長の北川貞二郎。見出しには「生きていてよかった」との文字が躍った。

北川は1941年に早稲田大学に入学。ボート部でエイトの一員としてオリンピック出場を目指していた。1943年11月、学徒兵として中国へ出生し、乗っていた列車が吹き飛ばされ、左耳が聞こえなくなっていた。1964年大会の時に、「ボートで日本一になったのに五輪に行けなかったキミが書け」と上司に諭されてペンを執ったのがこの記事だった。1943年10月21日に東京・明治神宮外苑競技場で行われた出陣学徒壮行会に参列した時の思い出をふまえ、戦地に向かった学徒兵たちを、東京オリンピックに出場するアスリートの姿に照らし合わせた。

「ほとんどの学生が学業なかばで動員となった。戦争目的も理解しえないまま、私も赤ダスキをかけた。明確であったのは『死なねばならぬ』ことだけである。世にも哀れな門出を、国民はここで盛大に送ってくれた。それは今、目の前を歩く日本の青年たちへの『メダルの期待』に数倍する期待であった。重苦しく、やりきれぬ期待を担って、私は角帽姿にゲートルをまき、銃をかついで、このフィールドを行進した。あのとき、私の踏んだ土のひとかけらぐらいは、今の美しいアンツーカーの底に残っているに違いない。」

北川さんは戦地に行き、左耳が聞こえなくなるという「小さな負傷をただけで」帰国した。1940年に一度は開幕が決まった東京オリンピックの四半世紀ぶりの復活を目の前で見た。そしてこう記事を締めくくった。

「ふた昔も前の、そんな話は何も知らない日本青年たちが同じフィールドを足音たてて踏んでいく。赤のブレザー、白のズボンのユニホームの、なんと美しく、りりしいことか。黒ずくめの服装で血走った目をしてここを歩いたことのあるボート選手OBは、ただもう、うらやましかった。戦場で片方しか聞こえなくなった耳に手をそえ、こみあげるものを押えつつ、後輩の足音を聞くばかりであった」

2021年に行われた2度目の東京オリンピックは、北川さんのようにスポーツで高みを目指した若きアスリートがたすき掛けのリレーでオリンピックにかける情熱をつないできたからこそ開催できたことを知らせる記事だった。

新型コロナウイルス禍にまみれてしまった2度目の東京オリンピックだが、世界中の人たちに平和の尊さ、困ったときに支えあう共助の精神を伝える大会になったのではないか。今回挙げた10の出来事はオリンピック史上

初めての出来事、さらには後世に伝えられるような期間中のエピソードであり、この論文も2021年夏にどのようなことが語られていたかを記録として刻むことに重きを置いてまとめた。大会を間近で観察した者としての義務だと思った。

北川は2度目の東京オリンピックを見ることに思いをはせていたが、2018年2月、94歳で死去した。夢はかなわなかった。

そんな北川に、東京大会は困難に見舞われながらも、スポーツの力を信じる多くの人々の尽力によって開催され、世界中の人々の心を震わせ「生きていてよかった」と思わせる大会だったと後輩からメッセージを伝え、この論文を締めくくりたい。

## 参考・引用文献

- 朝日新聞 (2021年7月1日～9月15日)
- 国際オリンピック委員会公式プレスリリース
- サンケイスポーツ (2021年7月1日～9月15日)
- 産経新聞 (2021年7月1日～9月15日)
- スポーツ報知 (2021年7月1日～9月15日)
- スポニチ (2021年7月1日～9月15日)
- 東京都教育委員会 (2019)「オリンピック・パラリンピック教育読本 高等学校編」
- 東京都報道発表資料
- 東京2020第47回理事会資料 報告事項
- 日本経済新聞 (2021年7月1日～9月15日)
- 2020東京組織委員会報道発表資料
- 日刊スポーツ (2021年7月1日～9月15日)
- 日本オリンピックミュージアム 「1920→2020 アントワープ大会から100年。復興と再生への挑戦」企画展資料
- 毎日新聞 (2021年7月1日～9月15日)
- 前橋市公式HPオリンピック・パラリンピック情報
- 読売新聞 (2021年7月1日～9月15日)